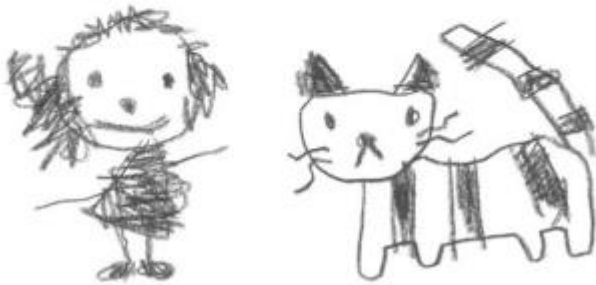


絵に正解はありません。誰かに評価されることや喜ばせたり驚かせたりするためではなく、自分がワクワクできればいいのです。まずは絵を描き始めることが大切です。どんな目的であっても絵を楽しんで描く習慣がつけば、誰でも上達していくのです。



「オノマトペ」とは、音や感触を言葉で表したものです。下の例を参考にしながら、思い浮かぶ音や質感を自由に描いてみましょう。オノマトペの練習をすることで、表現の幅がぐんと広がります。



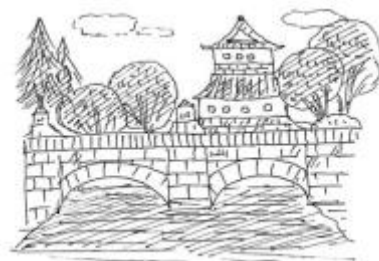
がたがた



ちくちく



ふわふわ



質感のある絵

質感のある絵

▶ 三角形と「がさがさ」

木



+

がさがさ



▶ 四角形と「くしゃくしゃ」

紙



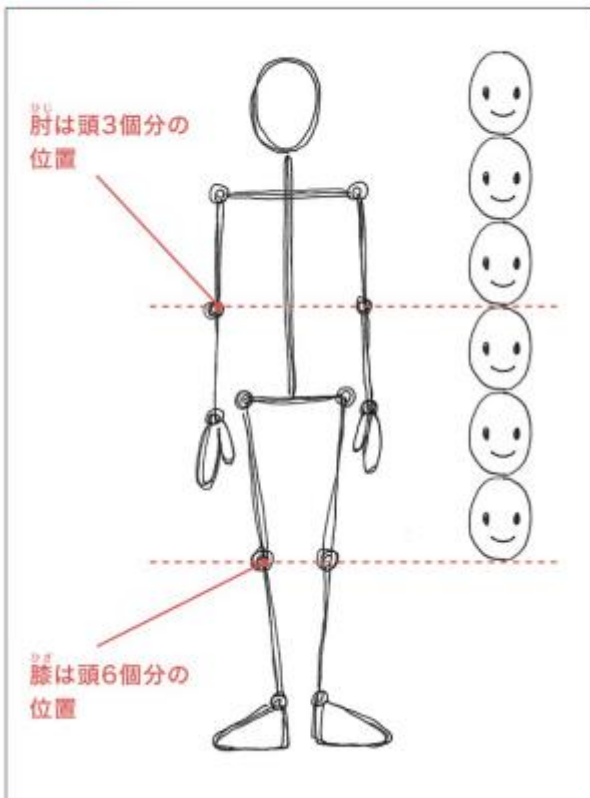
+

くしゃくしゃ



完成

肘と膝の関節を描いたら完成です。



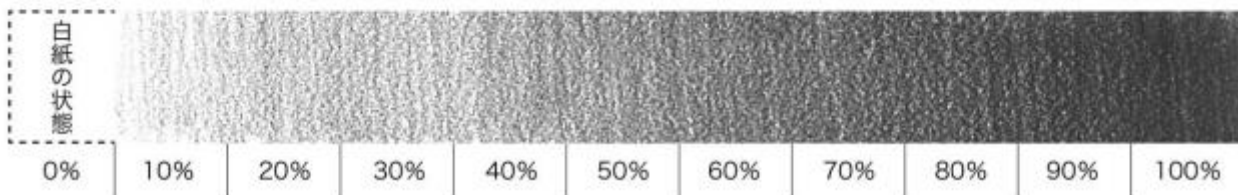
① バリューとは？

白から黒までの階調は、1本の鉛筆で自在に描き分けられるようにする必要があります。この色の階調のことを「バリュー」（色価）といいます。絵にバリューをつけることで、遠近感や、明るい暗いといった絵の雰囲気（ふんいき）を表現することができます。

② 鉛筆によるバリュー

鉛筆や絵の具といった使用する画材によって、バリューの表現の仕方が異なります。たとえば鉛筆では塗りつぶしの力加減や塗り重ねる回数によってバリューを表現します。絵の具では、白い絵の具からはじめて、少しずつ黒を混ぜる量を増やしていく、といった具合です。

ここではいちばん身近な画材である鉛筆で作成したバリューを紹介（しょうかい）します。白から真っ黒までの階調を、パーセントで表（あらわ）します。



③ 鉛筆を用意する

デッサンでは、鉛筆の芯の「腹」の部分を使ってバリューを作るため、芯の長さが1cmくらいになるようにナイフで削（けず）るのがベストです。濃（こ）さは2Bなどがおすすめです。



鉛筆芯の腹の長さが1cmくらいになるように削る

鉛筆の角度を変えて描く

角度によって描ける線が違います。実際にパリューや線を描いて違いを確認しましょう。



▲紙に対して平行に近い角度の場合
= 幅の広い面を塗りたいとき

パリュー



オノマトペ
(ふわふわ)



オノマトペ
(がさがさ)



▲紙に対して少し立てている角度の場合
= 丁寧に塗りたいとき



▲文字を書くときの角度の場合
= 細かい面や角を鋭くしたいとき



やってみよう

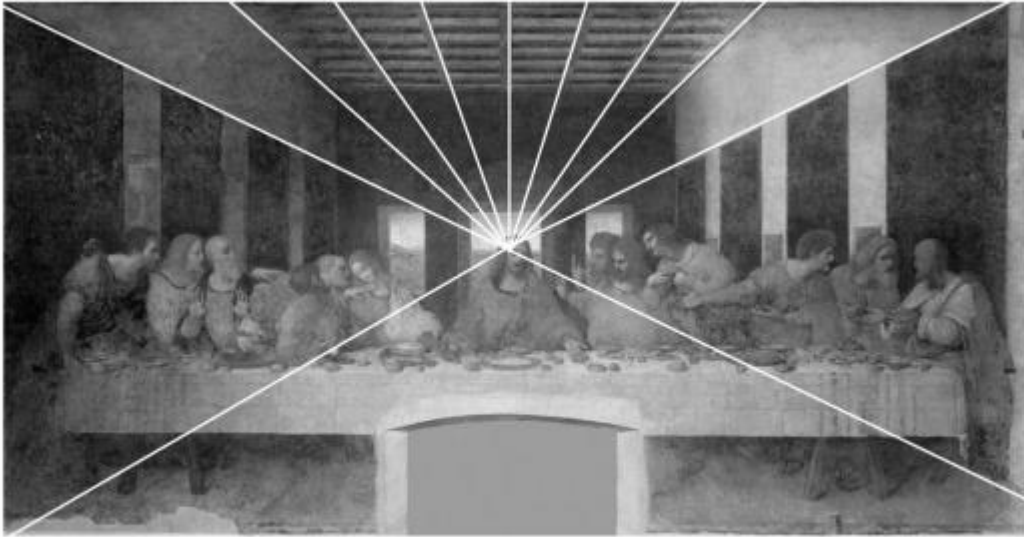
パリューで山並みを描いてみましょう。濃いパリューほど手前に、薄いパリューほど奥に見えます。



空気遠近法

手前のものほど濃く、奥に行くほど淡くかすんで見える現象を濃淡で表わし奥行きを見せる技法。山など遠くの風景だけでなく、立体感を表現するときにも使える。

消失点のある絵画

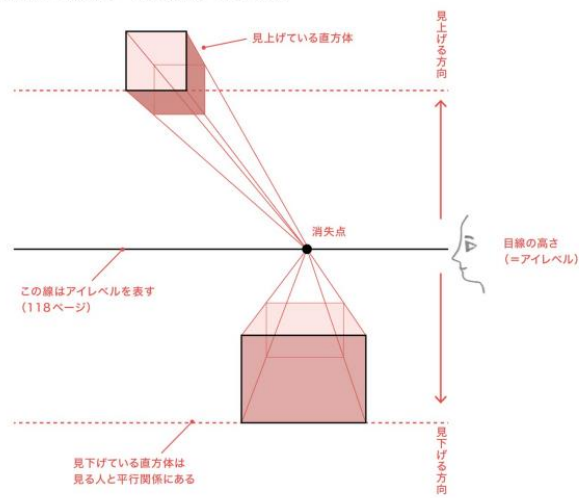


▲レオナルド・ダ・ヴィンチ作『最後の晩餐』(1495～1498年制作)

中央に座っている人物の額に消失点を設定した1点透視図法で描かれており、この絵を見る人をまるでその場にいるように感じさせる作品となっている

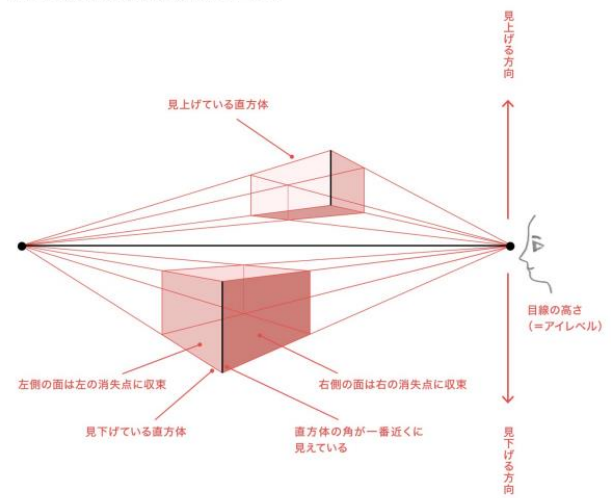
① 1点透視図法

直方体の正面に対して平行の位置に立っている状況は、下の図のようになります。すべての辺を奥に伸ばしていくと、1つの消失点に収束します。このように消失点が1つの遠近法を「1点透視図法」といいます。



② 2点透視図法

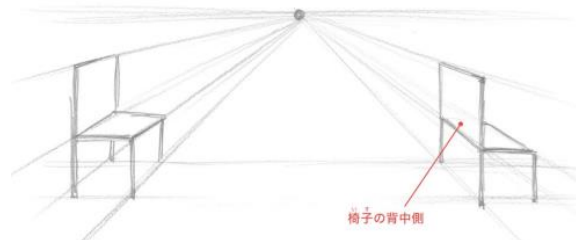
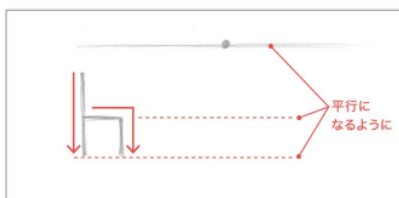
直方体の2つの側面が見える位置に立っている状況は、下の図のようになります。すべての辺を奥に伸ばしていくと、2つの消失点に収束します。このように消失点が2つある遠近法を2点透視図法といいます。



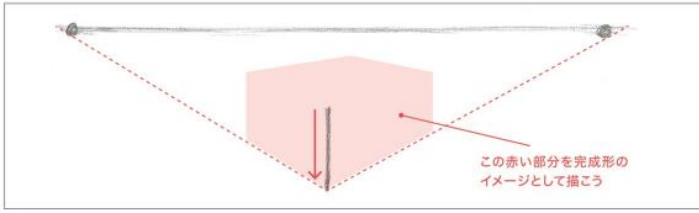
2 消失点の左下に椅子の側面を描きます。

🔗 練習のコツ

横線はアイレベルと並行になるようにします。

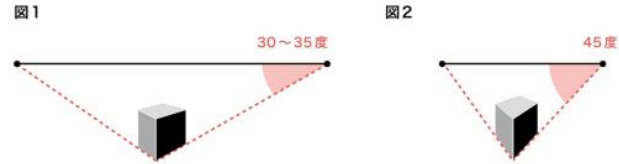


2 縦線を引きます。これが直方体の手前の辺になります

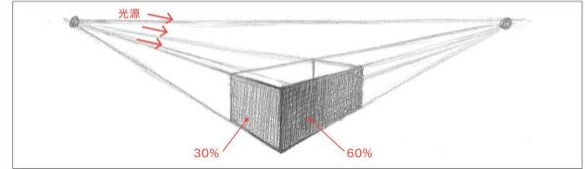


練習のコツ

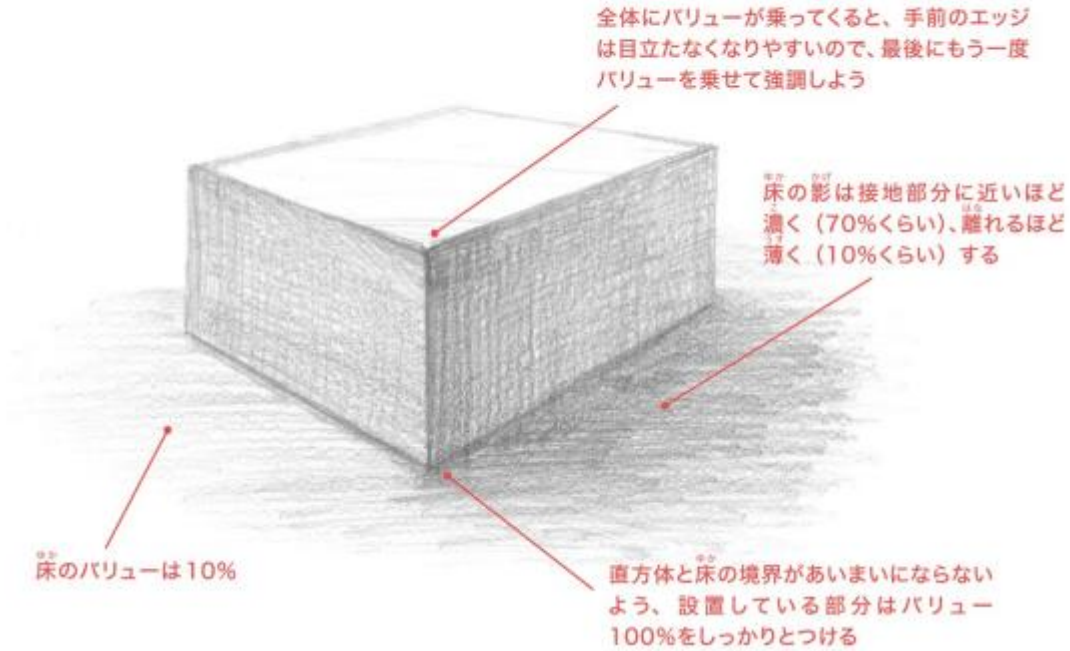
図1のように消失点をなるべく紙の幅いっぱいに設定すると、自然な見え方で描けます。図2のように消失点を狭い範囲に設定すると不自然（オーバーパスという）に見えます。



8 左奥に光源を設定し、左右の面にバリューを塗ります。



完成 補助線を消して、床に影を入れて完成です。

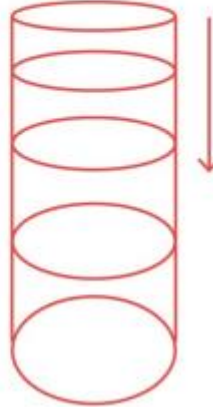


3 上下に楕円を描きます。



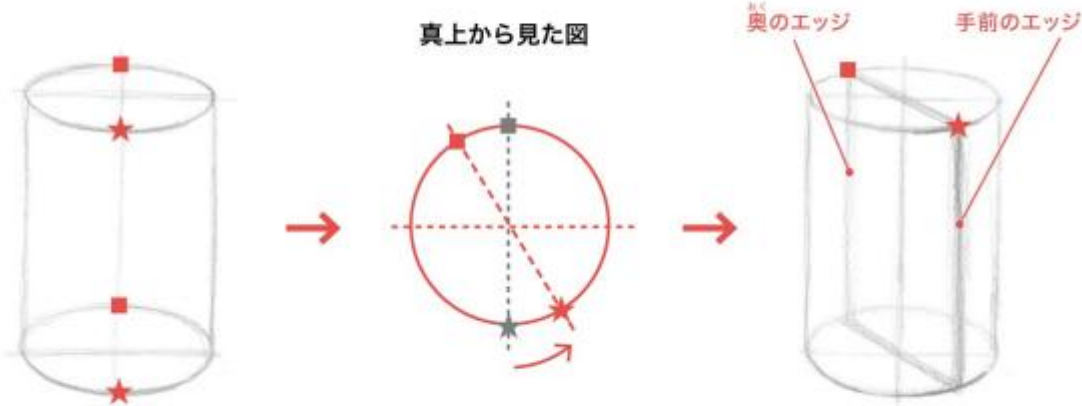
練習のコツ

上から見ている円柱では、下に向かうほど見下げている状態なので、下へ行くほど楕円は縦長になります。



練習のコツ

円柱を真正面から見ると、一番出っ張っている部分（手前のエッジ）は左の図のように真ん中です。ただ、この場合は手前のエッジ（★）と奥のエッジ（■）は重なってしまい、立体感の理解がむずかしくなります。そのため、4・5で斜めの位置にエッジを設定しています。

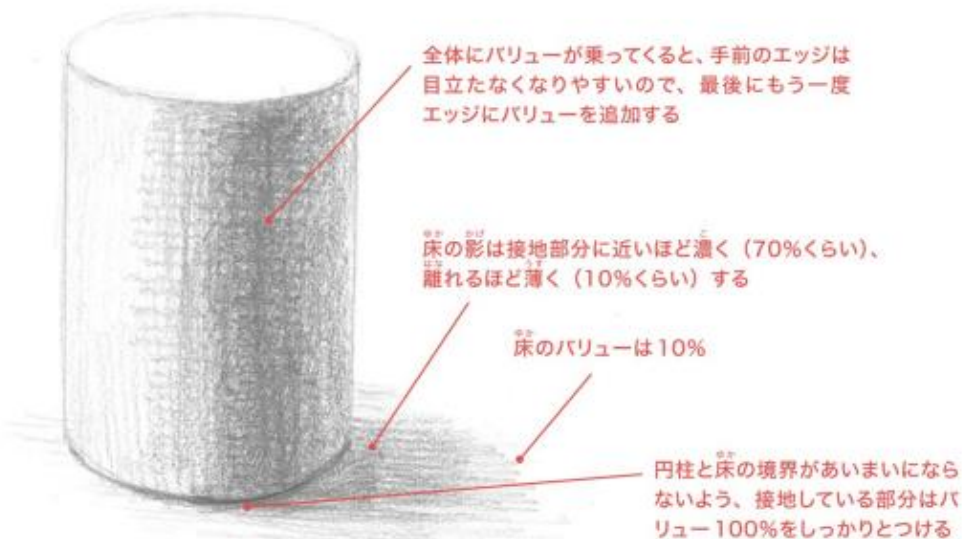


▲円柱を正面から見ると手前（★）と奥（■）のエッジはぴったり重なる

▲30～40度回転させる

▲手前と奥のエッジが重ならないので手前と奥の位置関係がはっきりと見える

完成 補助線を消し、床に影を入れて完成です。



そんなダ・ヴィンチの言葉で、「凡庸な人間は、注意散漫に眺め、聞くとはなしに聞き、感じることもなく触れ、味わうことなく食べ、体を意識せずに動き、香りに気づくことなく呼吸し、考えずに歩いている」というのがあります。

デッサンの基礎を学ぶと、五感の使い方が変わってくることに驚くはずですよ。

凡庸な人間は、注意散漫に眺め、聞くとはなしに聞き、感じることもなく触れ、味わうことなく食べ、体を意識せずに動き、香りに気づくことなく呼吸し、考えずに歩いている。